

## 武術家佚齋樗山の天狗芸術論と田舎莊子猫之妙術について

中村正己

### はじめに

江戸時代、関宿藩の久世家に代々仕えていた武術家佚齋樗山<sup>いつさいちよざん</sup>。本名丹羽十郎右衛門忠明が享保年間に著した武芸書の『天狗芸術論』並びに『田舎莊子』の「猫之妙術」について原文を意識し、取り上げことにした。

### 佚齋樗山と松平家・丹羽家について

佚齋樗山は、万治二年（一六五九）三月二十七日に父定信の子として江戸で生まれた。本名は丹羽十郎右衛門忠明という。丹羽十郎右衛門忠明の先祖は忠勝である。忠勝は三河国深溝「ふこうず」（現愛知県額田郡幸田町）出身で、父松平伊忠の二男として生まれた。出生年月日は不詳である。天正十三年（一五八五）七月、信濃国上田城主真田昌幸と徳川家康との戦いで大久保忠世らの武將並びに諸勢七千が出陣し上田城を攻めた。この時、御小性忠勝は大久保忠世の傘下で、戦功を挙げた人物である。兄松平家忠の戦死以降、従兄の忠利を助け、後に訳あって家を出て羽太と称し、家臣となった。『寛政重修諸家譜』兄の家忠は徳川家康の家臣で、幼名は又七郎、主殿助と呼んだ。

また、官名は紀伊守を叙任した。天文二十四年（一五五五）に

深溝に生まれた。家忠は武田氏との戦いで甲斐の平定に参戦している。また、小牧・長久手の戦いや小田原攻めなどに酒井忠次と共に参戦し、この間浜松城ほか多数の城砦工事に携った。その後武蔵国の忍城主一万石で入封した。文禄三年（一五九四）に伏見城の築城に加わり、その巧者ぶりは豊臣秀吉より賞賛された。慶長五年（一六〇〇）七月十八日の伏見城籠城戦では西軍の猛攻をうけ自刃する。時に四十六歳であった。

なお、家忠は天正五年（一五七七）十月から文禄三年（一五九四）九月に至る十八年間の記録を「家忠日記」として自筆し、この日記が現在も広く伝えられている。

この日記は、徳川・織田・豊臣・北条・武田諸氏の軍事行動、政策をはじめとして、連歌・狩獵・遊技・風俗など当代武士社会の生活事象に関する記事が豊富に筆記され、料紙の余白には挿絵が描かれている。形状は横帳袋綴じ、で七冊が現存する。次に、丹羽家二代目を継いだ人は成勝といった。成勝については不詳である。続いて三代目定信は、忠明の父にあたる。定信は、三河国加茂郡伊保（現愛知県豊田市）に生まれた。慶安元年（一六四八）から久世家に仕えた。同三年に母方の氏である丹羽氏に改姓し、名を十郎右衛門定信と改めた。定信の生母は

亀といい、丹羽三郎兵衛茂利の養女であった。元禄三年（一六九〇）に丹波国亀山（現京都府亀岡市）において没し、菩提寺は同所法華寺とした。法名は「妙心院燈日元」である。

四代目十郎右衛門忠明（佚斎樗山）は、関宿藩旗奉行の三百石取りで、久世広之・久世重之・久世暉之に仕えた。最も長く仕えた重之とは年齢も近く（一歳年長）約二十年間を重之とともに過ごした。享保五年（一七二〇）に重之が没し、妻のテルも死別して忠明にとつてこの年は人生の区切りの年であった。忠明は号を可溪斎（かけいさい）と呼んだ。寛保元年（一七四一）に病死し、関宿宗英寺に葬られている。法名は「佚斎樗山即応居士」である。武術家の忠明は、著述家でもあった。そして江戸文学に功績を残した一人だった。

佚斎樗山のことを最初に評論したのは、近代の考証であり随筆家の三田村鳶魚（えんぎよ）（一八七〇～一九五二）である。彼は、『教化と江戸文学』という著書の中で（三田村鳶魚全集第廿三巻）、佚斎樗山を「先憂の人」と評し、樗山の作品と伝記を紹介している。ちなみに「先憂の人」とは「天下の憂いに先立ち、天下の楽しみをあとで楽しむ」（先憂後楽）という意味である。鳶魚は、明治末期から大正昭和にかけて史実考証の分野で足跡を残し、昭和二十七年（一九五二）五月十四日に八十二歳で没した。

同書の中で江戸時代中期の儒学者、雨森芳州（一六六八～一七五五）が、樗山の作品『天狗芸術論』『田舎荘子』を読んで感服したことも述べている。

五代目の忠義については、不詳である。しかし忠義の弟にあたる正孝は代々関宿藩家老職を勤めた杉山家の養子に入っている。正孝の子孫の正臣（まさおみ）は市太夫対軒と名を改め、家老職となり四百五十石の家禄を有し、明治二年（一八六九）四月二十日に江戸から駕籠で帰国途中、杉戸町並塚で藩内反対派の手によって暗殺された。時に三十九歳であった。

六代目の忠嗣（ただつぐ）は、天明四年（一七八四）に中老職として藩主久世広明に仕えた。

七代目の忠處（ただおき）も、寛政三年（一七九一）に中老職として藩主久世広誉に仕えた。

天保十五年（一八四四）に八代目忠篤（ただあつ）が没したことによって、九代目は、弟の忠貫（ただつら）（慎蔵）が家督を継いだ。忠篤については詳細が不明である。忠貫は、文久三年（一八六三）三月に隠居して虚舟（こしゅう）と号した。しかし、翌年の元治元年（一八六四）十月に再び家老職に就き、関宿藩の動乱期に幼少の藩主久世広文を助けた。慶応三年（一八六七）十一月に再隠居した。その時に、兄忠篤の三男である慎蔵（後の忠望）を養子にして、分地五十石を譲った。忠貫は明治二年（一八六八）三月十九日没した。十代目の家督を継いだ鑿之丞（さくのじょう）は、忠貫の兄忠篤の二男として天保八年（一八三七）八月二日関宿にて生まれた。前述の慎蔵（忠望）と同様に忠貫の養子となった。のちに十郎右衛門忠教と改名し、用人職を勤めた。そして戊辰戦争の時に、万字隊へ入り慶応四年（一八六八）五月十五日に上野で没した。慎蔵は十代目の鑿之丞亡き後に忠望（ただもち）と改名し十一代目を受け継いだ。

ところで忠教には長女の貞、長男の忠良、次男丁三郎の三名の子がいた。長女の貞は明治六年（一八六七）に十三歳で他界した。長男忠良は文久三年（一八六三）十月一日に関宿で生まれ、福岡県土族井上与三（ようぞう）の養子となり、井上英太郎と名を改めた。二男丁三郎は慶応三年（一八六七）二月四日に関宿で生まれた。忠雄と名を改めた。その後、母（勝野兵馬女）の実家である福岡県小倉へ遁れた。母は連れ子のまま遠藤某と再婚し、遠藤達三郎を生み、ほどなく夫と離別または死別している。後に水野源六と再婚した。ちなみに、関宿宗英寺の丹羽家墓所内に遠藤達三郎の石碑が建っており、側面に「丹羽

忠雄異弟と刻まれている。十一代目の忠望は、兄忠教と同様に上野山で新政府軍と戦った。帰還した後、函館戦争に参加し、維新後は深津無一と姓名を改めた。ところで深津は先祖忠勝の出身地である深溝と関係があるものと思われる。深津無一は、福島県令を皮切りに明治七年（一八七四）秋田県九等書記官、同十年（一八七七）に一等警部弘前裁判判事、同十二年（一八七九）以降は山形県書記官、富山県書記官、大蔵省主税官、秋田県書記官を歴任した。

## 天狗芸術論について

長年に亘り武術の修行を重ねてきた一人の武芸者がいた。しかし、容易に満足できる心境ではなかった。かつて源義経が牛若丸と呼ばれた頃、鞍馬の山中で大天狗、小天狗から秘術を授かり、美濃赤坂の宿で熊坂長範の一味を成敗したという話を聞いた武芸者は天狗の教えを受けたいと願い、深山に分け入って岩石に座り、毎晩天狗を呼んだ。

ある夜、にわかには風が吹き、天狗が天から降りてきて大きな杉の上に止まり、武芸の真髓を語ったという。このような内容で記載される『天狗芸術論』は、武芸の極意（奥義）を会得する武芸書である。

本書は、巻之一、二、三、四の四巻から構成されている。

### 巻之一

天狗は、武芸者に対して修行によって心身を一つにすることを述べている。つまり、技術と道理との一体化は修行によって成し遂げられる点を新陰流などの武術論で説くところであるが、ここでは特に「氣」について重要であるとしている。「氣」とは、人間の精神的、生理的エネルギーを一体のものとして言い表した言葉で、中国宋代に流行した理気二元論（道理

と精神）の概念を指している。

続いて、当世の修行者の気質（気性）を天狗の言葉として「武芸の修行は長い時間をかけて高い技術を習得し、武芸の道理は悩み続けながら自ずと理解が得られた。師匠も道理は安易に教えず、弟子達自らが理解することを待つばかりであった。しかし近頃の若者は苦勞せず小手先の技ばかり学ぶだけで終わってしまう。師匠も初心者にも極意を手にとつて教えている。これでは理屈ばかり達者となってしまう。」と答えた。

また、名僧は剣術において名人かとの問いに「禅僧と武芸者とは修行の目的が違う。禅僧は生死送りし輪廻の世界を離れ、永年の平和を求めて最初から死んだのも同然の境地に心を置くことによつて生死から抜け出るものである。したがつて多くの敵のなかにあつて、その身粉々にされようとも精神を動かさぬということは十分に可能であろう。だがこの修行は生命を守る役目を果たさない、だが死を恐れないというだけのことである。」と答えた。

### 巻之二

技術の修行と心の修行は一体なものである。つまり、学問にせよ技術にせよ、私心さえ捨てれば、天下に自分を左右する者はいなくなり、自由自在になるのであると述べている。ちなみに、私心とは物欲や情欲だけでなく、心になにか偏屈があればそれも含まれるとしている。

続いて、武芸者が「私に大勢の子供がいる。まだ年が若く、剣術の修行をどのようにさせるべきか」と天狗に問うたところ、天狗は「年若で、物事の道理を理解する力が無い者に対しては、細かい理屈は後まわしにして、まず師の指導のもとに、必要な技術を習得させ、その上で精神の修養を行わせ極意に達するよう導いてゆくのである。これが修行の順序というものである」と答えた。

また、武芸者は「動いて動くことなく、静かにして静かなることなしとは、どのようなことをいうのか」と天狗に質問した。天狗は「人間は活動するものであり、静かにしているわけにはいかない。社会生活における動きは多種多用ではあるが、道を体得した者は、その心を環境によって左右されることなく、欲をすてて、冷静な心を持ち続けることができるのである。これを剣術に例えるならば、大勢の敵にとりかこまれ、戦う時に生命を守ることに執着せず、精神が安定して、敵に心を奪われることなく、このような境地を動いて動くことなしと云うのである」と答えた。

### 卷之三

次に心の動きをたとえた「水月」という問答では、武芸者が「水月とはどういうことか」と天狗に質問した。天狗は「流派によっていろいろと理屈をつけているが、結局のところ、無心の境地にあつて自在の動きをすることを、水に月が映るのにたとえた言葉である」と答えた。

「残心とは本心を失わぬことと言うが、残心とは何であるか」と武芸者が天狗に質問した。「自分がふるう技に引きずられることなく、心の本体を動かさぬことをいうのである。心の本体がしっかりと落ち着いてこそ、客観的に広く対応できるものである。これは社会生活の上においても同様である。振り上げた太刀を地獄の底まで打ちおろす時にも、その本心は失われていない。だから前後左右、自由自在に働くことができるのである」と答えた。

また、「各流派に、『先手をとれ』という教えがあるが、これは初心者に積極性を起こさせ、怠け者を鞭打つための言葉である。心の本体がしっかりとしていると自己を見失うことなく、全身に精気がみなぎり、先手はつねにわが方にある。先手をとりというものは、なにも人より先に打ちこもうというものではない。

い。つまり剣術において大切を養い、死気を克服するものである。先にも述べたが『動いて動くことなく、静かにして静かなることなし』と同様の意味である。」と述べている。

最後に武芸者が、「極意」は一般に公開してもよろしいかと天狗に質問した。天狗は「剣術の道理は、天地の普遍的な道理である、自分が理解できるなら、天下の人すべてが理解できる筈である。秘密にするのは初心者に教える場合である。なぜならば初心者が信頼を失うからである。秘伝は技術の本筋であつて、本当の極意ではない。従つて、慎の極意は公開してもかまわない」と答えた。

### 卷之四

続いて武芸者は「槍で素槍、十文字槍、鉤槍、管槍などが伝えられているが、どれが有利なのであるか」と質問した。

天狗は「何という愚かな質問であろうか。槍は突くための道具である。自由自在に突けるようになるのは自分自身なのであつて槍という問題ではない。しかしながら、鎌を付けたたり、柄に鉤を組んだり、柄に管をかぶせたりして槍を使うということとは、それぞれ先人が会得としたものに更に工夫をこらし、道具の機能を高めて、自由自在に道具を使えるようになったということである。そして、今の時代はその流儀を学ぶ者は、始からその道具を使って練習してきたわけであるから、他の道具よりも使いなれた道具で習うのが有利であろう。上達してその道具を自由自在に使えるようになった場合は、例え棒を持っても槍を持って同じである。」と答えた。

### 田舎荘子「猫之妙術」について

本書は、享保十二年（一七二七）に、佚斎樗山が中国の荘子の思想や説話を参考にして著した談義本（滑稽本）である。同

年に江戸京端南四丁目の和泉屋義兵衛板元で売り出された。巻上・中・下の三部構成で、そのうち巻中の剣術談義をとり入れた「猫の妙術」について原文を意識し、取り上げてみることにした。

勝軒という剣術者の家にいつからとなく一匹の大鼠が住みついて、真昼間から遠慮なく座敷に現れて暴れ回っている。飼猫に退治させようとしたが逆に鼠に喰いつかれてしまった。そこで近所の家から猫を借りてきて退治しようとしたが、どの猫も大鼠には刃が立たず、勝軒は自ら使い慣れた木剣で挑んでみたが、巧みに体をかわされ、いたずらに襖や障子を破られ、顔や手足に傷を付けられ、さすがの剣の名手も困り果てた。その時ふと六、七丁（約八百メートル）先に「無類秀逸の猫」がいる噂を思い出し、早速その猫を借りて襖を開けて放り込むと、大鼠は一步とも動かず、古猫が大鼠を啜えて来た。

その夜、古猫を上座にして古今無類の猫族会議が開かれた。最初に煤のような黒猫が口を切った。「私は、鼠を捕る家に生まれ、幼少の時から、その道を修練し、早業で梁や桁を走る鼠を捕り損じることにはなかったが、今回ばかりは捕り損じてしまったと悔しがった。

議長席の古猫は次のように答えた。

「お前が修練したのは、巧みに操る手先の技である。古人が教える技法は道筋を教えるもので、したがって形は簡単でも、そのなかに深い真理を含んでいる。その真理や道筋を知ろうとせず、形式だけの技をまねると、道理に基づかない偽りの技巧になってしまふ。その点を反省し工夫をするとよろしい。」

次は、虎毛の大猫が発言した。

「私の思うには、武術というものは氣勢を尊ぶ。そこで私は、その気持ちで負けぬように戦った。今ではそのために物事にこだわらない剛健な気風になった。その気合で相手を圧倒し、相手の出方次第で自由に応戦すると、技は無心の境地となった。

ところがあの鼠は、往くにも来るにも跡形というものがなくて、どうにも技の施しようがなかった。」

この話を聞いていた古猫は「お前の修練したのは、気の勢いで働くことだ。それは自分本位で真理に基づいていない。自分の気持ちが強いつ時は良いが、相手の方が強いと負けてしまふ。孟子の言う浩然の気と似ているが、孟子は真理を以て剛健であり、お前は勢いに乗って剛健である。例えて言えば孟子は大河の流れでお前は一夜の洪水のようなものだ。窮鼠きゆうそが猫を噛むのは生も欲も忘れ勝負を度外視しているから心は鉄のようになり、こんな相手に気負いだけで戦っても勝てる訳がない。」

次に虎毛の若い猫はやがて静かに進み出て「全く仰せの通りである。私は常々いたずらに気色ばらず、物を争わず、心の和を保ち相手に合わせてきた。今日の鼠は何としてもこちらの和に応じようとしなさい。あんなものすごい奴に出会ったことはない。」

そこで、古猫は「なるほど、お前の和は自然の和ではない。思慮分別から和をなし得ている。敵の鋭気ははずそうとしてもわずかに考えるから、相手は敏感に察知する。無心の妙用など到底發揮できるものでない。そこで思慮分別を断つて無心無為の感に随うべきである。」と述べた。

「けれども、お前達の修行したことはみな無駄かというところ、決してそうではない。技といえども宇宙の真理の表れである。気は心の用をなすもので、要はそれらが作為から出るか、それとも無心から自然に流露するかで、天地へのへだたりで出来るのである。」

古猫は続けて「私の言うことの道は極致だと早合点してはだめだ。私がまだ若い頃、隣村に一匹の猫がいて、朝から晩まで居眠りをし、さっぱり氣勢も揚がらず、まるで木で造った猫のようであった。誰もが鼠を取ったのを見たことがない。けれども不思議なことに彼のいるところには一匹の鼠もいない。沢山

鼠がいるところに彼を連れていっても鼠の影も形もない。私は彼にその訳を聞いてみたが、彼は答えなかった。いや、答えないのでではなく、答えられなかったのである。彼こそ本当の己を忘れ、物を忘れ、物なきに帰した境遇であった。自分などとはとも及ぶことではない」

勝軒はこの問答を夢うつつ聞いていたが、思わず進み出て、丁寧な古猫に向かつて「私は長年、剣の道を修めてまだその奥義に達しなかったが、今宵は皆さんの話を聞いて剣の極意に達した。願わくばさらにその上の奥義を教えてください」と申し述べた。古猫は、「自分は獣であり、鼠は食物であるので、なぜ人間のすることが分かるのか。それでも聞いたところに、剣術というものは人に勝つことではなく生死を明らかにすることだ。士たる者常に心を養い、技の修行をすべきだ。敵もなく我もなく来る物に応じるだけなのだ。」と答えた。

そこで「敵なし我なしとはなにか」と勝軒が重ねて聞いた。「敵と我とは、相対的なもので、我があるから敵ができるので、したがって我なければ敵もない道理である。一体、形あるものはことごとくみな相対的である。だから、自分の心に固定的な像がなければ、対するものもなくなるのではないか。それが敵もなく我もなしと言うのである。心と像とも忘れて湛然（静で動かざること）として無事なるときは和して一つとなる。湛然として無事なる時は、世界は我が世界となる。」

以上が「猫之妙術」のあらすじである。これはむろん「田舎莊子」の表題が物語っているように「莊子」の達生篇にある。鬪鷄を養う話などから換骨奪胎（古人の作品の趣意を変えず語句だけを言い換えた作品）と考えられる。

## 佚斎樗山と熊沢蕃山

熊沢蕃山（一六一九—一九一）は、江戸時代前期の儒者である。

元和五年（一六一九）京都の野尻家で生まれ、八歳のとき祖父方の熊沢家の養子となった。寛永十一年（一六三四）の養父死後、縁あって岡山藩主池田光政に仕えた。五年後、修学の道を志すべく儒学者の中井藤樹を訪ね入門を願ひ許された。「大学」や「中庸」を学んでいたが、一家の生計が困難になり、半年余の受講で郷里へ帰った。その後も、藤樹とは学問的に深い関係が続いた。そのお陰で光政に学才を認められ、岡山藩の番頭三千石に抜擢されて信任を得た。その実績は、治山・治水・大洪水、承応三年（一六五四）の飢饉などの対策に大きく貢献した。

明暦三年（一六五七）正月、蕃山が三十九歳のときに光政の三男政倫を養子として迎え、病気を理由に致仕を願ひ出て、備前国寺口村（岡山県備前市）に隠居した。京都では、多くの公家・幕臣が師事し、陽明学者として名声が高まっていた。

しかし、当時は林羅山の朱子学が全盛期であり、蕃山の陽明学に対する迫害が強くなり、京都所司代の牧野親成に忌憚（遠慮）されるところとなった。そして京都を去り、板倉重矩の斡旋で明石藩松平信之のもとに一時身を寄せた。

延宝三年（一六七五）十月蕃山は江戸へ下り、久世広之邸で関宿藩の家臣達に学問を教えることとなった。この時、佚斎樗山は諸席に加わり蕃山に強く影響を受けたと思われる。因みに、樗山の「山」は蕃山の「山」を用いたという説がある。

延宝七年（一六七九）に、信之が大和郡山へ移封となったため、蕃山もこれに従い大和国生駒郡矢田山（現郡山市矢田山）に居を構えた。

天和三年（一六八三）には、大老堀田正俊らに招かれて再び江戸へ下り、幕府への出仕を勧められたが固辞し続けた。

貞享二年（一六八五）松平信之が下総古河に移封になった時に、古河に招かれた。同四年参勤交代制を批判する「大学或門」（だいがくわくもん）を著し、幕府の忌憚に触れ、幕命によつ

て禁錮の身となり、そのまま古河で幽居の生活を送ることとなった。元禄四年（一六九一）に没し、鮭延寺（古河市大堤）に葬られている。享年七十三歳。

## むすび

佚斎樗山集（叢書江戸文庫）によると佚斎樗山が著述した『田舎莊子』『猫の妙術』を初めとして、上巻に「雀蝶変化」（すずめちようのへんか）「木兔自得」（みみづくのじとく）「蚊蛇疑問」（むかでへびにぎもん）「鷗遊論道」（かもめかげろうみちをろんず）「鴨鶉得失」（ひよどりみそさざいのとくしつ）「鷺鳥巧拙」（さぎからすのこうせつ）、中巻は「菜瓜夢魂」（なぶりのゆめごころ）「墓之神」（ひきのしんどう）「古寺幽霊」（ふるでらのゆうれい）・「蟬蛻至楽」（せみからのしらく）・「貧神夢会」（ひんじんのゆめのかい）、下巻は「莊右衛門が伝」（そうえもんがでん）が収録されている。他に「莊子大意」（そうしのたいい）、「外扁」（がいへん）、「河伯井蛙文談」（かはくせいあぶだん）、「再来田舎一休」（さいらいいなかいつきゆう）、「六道士会録」（ろくどうしかいろく）、「英雄軍団」などを享保十二年（一七二七）から同十四年にかけて京都や江戸で著した。

## 参考文献・引用文献

- 芝泰子著『正統三河武士の最期』（一九九四年）（株）新風書房  
吉田豊編『武道秘伝書』（一九七三年）徳間書店  
大森曹玄著『剣と禅』（二〇〇八年）（株）春秋社  
三田村鳶魚著『三田村鳶魚全集・第廿三卷』（一九七七年）中央公論社  
石井邦夫訳注『天狗芸術論・猫の妙術 全訳注』（二〇一四年）

講談社

高田衛・原道夫編『佚斎樗山集』叢書江戸文庫十三（一九八七年）国書刊行会

古河市史編さん委員会『古河市史研究』十二（一九八七年）『国史大辞典』（一九九三）（株）吉川弘文館

（なかむら まさみ 当館展示協力員）



佚斎樗山集



丹羽家の墓(宗英寺)



天狗芸術論

